

【水鏡】

然る落日、水面に浮かぶ、わたしと思しき姿をみた
—

掌どうしを重ね合わせ咲かせる花は
まじりけのない、たったひとつの声帯を
そこはかとなくふるわせる

ことばにならない歌や
空気を裂くような調べを
あなたは響かせる

思い描く花の姿
たったひとつの夜に抱える

ひび割れた水像の
ことばにならない歌や
空気を裂くような調べが
取り残されたわたしの
心臓のひだに
くいついて離さない

時を汲む
鞘に満ちていく
おもかげの

形が保てず
ぼたぼたとしたたる音が
こだまする

掌どうしを重ね合わせ咲かせる花は
まじりけない、たったひとつの声帯を
そこはかとなくふるわせる

これ以上あなたの歌が
こぼれおちてしまわぬように
わたしは網の目のように手を組んだ

【停留】

然る夜、水面に佇む、わたしと思しき姿をみた

—

濃霧に包まれた
水鳥の長い脚が
渇いた水面を突き破り

あたり一帯に
沈殿したどろを漉し
脈拍を整え

白んだ霧雨
凍りついた羽根が
ゆっくりと熱を持つ

腐敗した木の根、
砕けた山肌、染み込む樹液、
陽だまりに消し飛ぶ砂鉄、
深い穴の底からの眼差し

太鼓の音のような地響き、
濡れた枯葉、甲虫の死骸、
風の送り込まれる水面、
翔び立つわたしの眼差し

覆い隠さんばかりの
濃霧に包まれて
死に際に降り立つ
黒鳥の両翼が

わたしの中を過ぎ去った
ありとあらゆるものたちを
引き連れてくる

泥の沈黙は
かすかな脈拍を残し

渇いた月明かり
その断面に
ゆらめく波紋

濃霧を突き破り
水しぶき
降りそそぐ

【分流】

わたしは夜明けを信じた
潰れた実のような夢とともに

あれは誰の声だろう
遠く離れた耳朶を打つ
霞のなか
対岸のことば

至近距離の耳朶を打つ
ささやき

ぶかぶかと
空中へ吸い上げられる
わたしだったものたち

かつての星であり
川であったものたち

対岸のことば
誰の声だろう

あかりの灯った目尻に
悔いのない漂着

眼前に横たわる
暗闇を踏みならし

その果てにみた
あなたの叶えたであろう
悔いのない漂着

霞のなか
耳朶に残る
ささやき

かつての星であり
川であったものたち

【逆流】

わたしは夜明けを信じた
まっくらやみのとこしえに

もえさかる幻想を巻き戻す
潮のかおりでよみがえる声

はりつめた血管
風の心音が過ぎ去る間際

静止したデルタにひろがる
小さな波紋を
物陰からじっとみつめてる

わたしは心待ちにする
未明の寝息が
孵化する春の訪れを

さざなみが足首をくすぐって
わたしの血液は押しもどされる

風を越え
夜を越え
小さな波紋はひろがり続け
まっくらやみに火をくべて

獣の声が立ちあがる
体内に渦巻く影が立ちあがる

青い旋律は
息巻く春の脈拍の開花

飛沫がくずれる
花からくずれる
影がくずれる

誰の声でもない歌
かすかに耳元で逆立つ

夜が明ける